

力持ちの喜代七さん

むかし、伏谷下伏に大層力の強い喜代七さんという若者がいました。喜代七さんは、百姓はせず、山の仕事を本業にしていました。

廿日市や河内方面へ炭や板を運ぶには、もっぱら馬を使っていました。その頃の馬追いさんは、馬に炭を二俵、自分が一俵背負い、合わせて三俵運んでいましたが喜代七さんは一人で、三俵を背負うて峠を越していました。

喜代七さんは米を作らないので、飯米はいつも玖島の方から買っていました。秋の採り入れのときに粃摺りしたものは秋びき米、梅雨上がりに粃摺りしたものを今びき米といって、秋びき米より高く売られていました。

ある年の夏の初め、喜代七さんは今びき米の方が美味しいので玖島まで買出しに行きました。四斗入りの俵（60キロ）を三俵背負って帰り、道べりの田の畦にその荷を降ろして休んでいました。通りがかったお婆さんが不審そうに、

「あんたあ、馬もおらんようじゃが、どうしてこの米をはこんできんさったのかいのう」
喜代七さんは

「これくらいの米を運ぶのに馬なんかいいやあせんわい」

と言いながら、どっこいしょと、背負いあげて歩き出しました。

この怪力振りを見たお婆あさんは、あきれかえり、目を丸くしてみんなに話して歩きました。こんな力持ちだから、近くの村からも荷物を運ぶのに頼まれて出向いていました。

山県の方へ材木運びに行った時こんなことがありました。

切り口が四寸と八寸（一寸が三センチ）長さ七尺（約二メートル）、一本が三十キロぐらいの栗の木があり、「五本ぐらいは背負われるじゃろう」と言って喜代七さんが背負おうとすると、山県の力自慢の人も「わしも五本ぐらいは、平気だな」

喜代七さんは六本にしました。すると先方も意地を張って六本にしました。

やがて二人とも六本ずつ背負って山を下り始めました。一時間ぐらい歩いた頃、喜代七さんは谷川に近づいて、腰を低くしました。山県の方は「さては参ったか」と改めてよく見ると、喜代七さんは荷物を背負ったまま、手を伸ばして水をすくって飲んでいました。

「こんな真似はととても出来ない。この男の力は大したものだ。わしの負けだ」

とあっさり降参したということです。喜代七さんは毎日こんなに働いたわけではなく、時々気の向いたときに働き、気ままに過ごしたといわれています。